

## 前期チャールキヤ朝史の再検討 (その3)

### — 3代王マンガレーシャ時代の社会と文化を中心に

石 川 寛

はじめに

6世紀から8世紀にかけてインドのデカン地方を支配した前期チャールキヤ朝の事績において、第4代プラケーシン2世が、北インドの覇者ハルシャ・ヴァルダナを南北インドの境に位置するナルマダー川の河畔において破った戦いは、インド古代・中世史において画期をなすものであった。それまで長い期間北インドの影響下におかれることの多かったデカン地方を含む広義の南インドの政治勢力が、この出来事以降、逆に北インドに対して攻勢を仕掛ける場面も少なからずみられるようになったからである。ラーシュトラクータ朝(8世紀~10世紀)のドゥルヴァ、ゴヴィンダ3世、チョーラ朝(9世紀~13世紀)のラーラージャ1世、ラージェンドラ・チョーラ1世父子らによる北インド遠征はその典型的なものといえることができる。

南インドも、北インドと同様、6世紀以降の数百年という長期間で見れば、決して戦乱の絶えることはなかったし、自然災害に見舞われることも少なくなかったと考えられる。ラーシュトラクータ朝の諸王が、その称号に「雨を降らす能力」を打ち出したのは、逆にそれだけ水の確保が死活問題であったことを端的に示している<sup>(1)</sup>。

それでもおよそ6世紀から13世紀にわたる時代に、典型的には北インドのグプタ朝社会で成立した古典的サンスクリット文化を受容し、ヒンドゥー教的社会秩序の確立に努めた南インド社会が、一定の成果を取めたことは否定できない。デカン地方やタミル地方で国力を充実させた王国が継続的に出現し、その過程で時に対外的にも大きな戦果をあげたのは、上述の諸王による北インド遠征においてであった。本稿ではそうした事例の先駆としての、前期チャールキヤ朝時代を取り上げ、北インド遠征で名をはせたプラケーシン2世の先代のマンガレーシャの治世を中心に、主に社会の面から文化発展の具体相をたどることに努める。

上のプラケーシン2世の治世はもとより、前期チャールキヤ朝の全期を通じての研究は、2010年にS・Vパディガールによって452の刻文を収める包括的な史料集(Padigar [2010])が出版されたことにより、さらなる進展がみられるようになっている。筆者もこの史料集を参照して、すでにいくつかの論考を発表しているが、その1つはこのプラケーシン2世と先代の王マンガレーシャの時代に焦点を当てたものであった<sup>(2)</sup>。しかしそこで

十分に論じることのできなかつた社会や文化の重要な問題も少なからず残されており、本稿ではそうした諸課題に取り組むことにしたい。特に第3代の王マンガレーシャについては、内乱によって甥のプラケーシン2世によって廃されたという歴史的事実がはたらい、内乱以降の史料に依拠する限りその正当な位置づけを試みるには少なからず困難が伴うことを考慮しなければならない。

筆者は、3代王と4代王の対立という事実にもかかわらず、後者の治世には先代の宗教文化政策を継承発展させた性格が強くみられること、またタミル地方のパッラヴァ朝による首都バーダーミ占拠で生じた王朝支配の十数年に渡る空白を克服した王朝後半期の繁栄においても、3代王マンガレーシャの先駆的な政策が結実したとみられる点が少なくないと考えている。以下ではそうした諸点に焦点を当てて論じていく。

しかし周知のように、用いる史料はいわゆる歴史書ではなく、王や地方統治の有力者などがヒンドゥー教寺院やバラモン集団などの宗教者に対しておこなった寄進行為を記録する刻文が大半を占めており、その内容はきわめて限定的な範囲にとどまっています。当時の社会全般のあり方を明らかにするには大きな制約があるが、かなりの年代幅に渡る史料をつき合わせたうえでそこに散見される社会史的記述を照合し、いささかの推測も交えながら少し踏み込んで、当時の社会や宗教文化の様相をできる限り具体的に明らかにすることに努めたい。

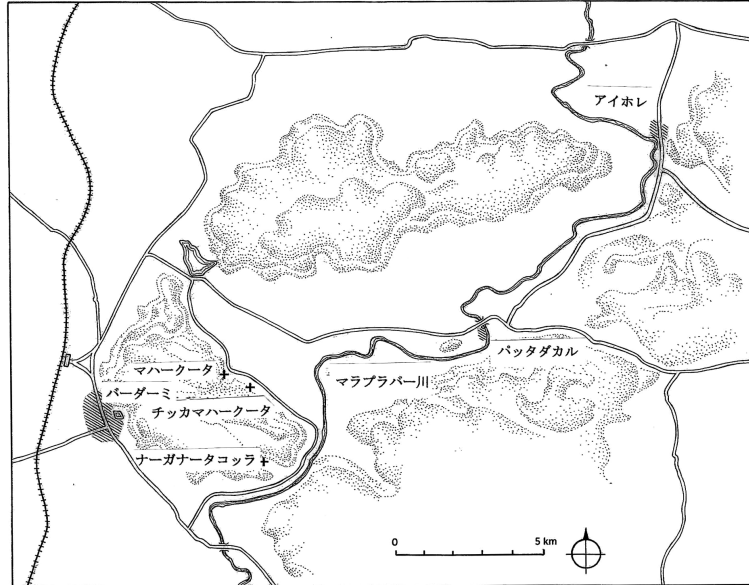
## 1. 3代王マンガレーシャの時代の史料の試訳

最初に3代王マンガレーシャの事績を検討するうえ重要な史料を示しておこう。マンガレーシャがのこした刻文は、兄キールティヴァルマン1世の時代のものも含めて現時点で7つが知られている。以下ではそのうち3つを掲げるが、1つはマンガレーシャ自身が造営に深くかかわったと考えられる都市マハーケートにある寺院群の中の一つの寺院の柱に刻まれたもので、マハーケート石柱碑文と呼ばれている<sup>(3)</sup>。今1つはマンガレーシャが兄のキールティヴァルマン在位中、首都バーダーミの丘陵上に開削した石窟群の第3窟に刻まれたもの<sup>(4)</sup>。いずれも長文のサンスクリットで書かれているので、ここでは本稿の議論にかかわる部分を中心に抄訳として掲げる。3つめは同じ第3窟の脇の壁に刻まれた古カンナダ語碑文で<sup>(5)</sup>、これは全訳を示す。[地図参照]

### 1) マハーケート石柱碑文 (抄訳)

kanīyān – uru – ranavikrānta – Maṅgaleśa – śrīpṛthivīvallabhēndrākhyā – nṛpo babhūva

[キールティヴァルマン1世の] 弟で、卓越した、戦いにおける英雄のマンガレーシャは、「大地の女神に愛されている支配者」という称号を持つ王となった。



deva – dvija – guru – caraṇānudhyātāḥ Calikya – vaṃśāmbara – pūrṇacandraḥ  
神々、バラモン、師の足下にひれ伏し [敬意を表する] 者。チャールキヤ家という  
天空に輝く満月。

naya – vinaya – vijñāna – dāna – dayā – dākṣiṇya – sampannaḥ  
政治、規律、知識、気前の良さ、憐憫の情において美質を備える。

これ以降もかなりの長さにわたって、マンガレーシャへの賛辞が続くが、王としての対  
外的交渉や軍事上の作戦のかかわる以下の表現を付け加えておこう。

mantra – cāra – dūta – sandhi – vighraha – sthāna – prayāna – pārṣṇigrahaṇa – maṇḍala –  
yātrā – durgavidhāna – jānapada – paura – mānya – vibhāga – kuśalaḥ  
聖者への諮問、密偵の活用、使者の選択、和平交渉、開戦の決断、宿営の設置、  
後陣の敵への攻撃、遠征軍の指揮、町の人びとへの報酬の配分、などにおいて巧妙  
である。

おわりに、この碑文の中心的な内容である寄進についての記述を示す。

Damayantīm – iva mahāpativratām Batpūra – kula – lalāma – bhūtaṃ naikavidha –  
dharmma – phala – bhāgya – pavitrīkṛta – śarīrāṃ sva – guru – patnīm Durllabha – nāma  
dhēyān – devīm āhūya idam – adhikāraṃ – sambodhayati [ 1\* ]

淑女ダマヤンティーのような極めて貞淑な妻、バップーラ家にあつてその麗しさを  
体現する者、多くの篤信の行為の果報で身体が浄められた者、父の妃であるドゥラ  
ヴァという名の女性の面前で（を招いて）、この行為 [のめざすもの] を広く知ら  
しめる。

Kalatsūri – dhanam – svam devagrha – devadroṇyām gatam – idañca dravyam sva –  
devadroṇyām

カラツウーリ（カラチュリ）[から戦いで奪って] 自らのものとなった富は、[マク  
テーシュヴァラ寺院の] 神の乗り物である舟に所属する。

Makuṭēśvaranāthasyāsmākaṃ pitrā jyesthena cōpadattaṃ Śrīyambāṭaka – Tirmmaridve –  
Nasavedve – Vṛihimukhagrāma – Kesuvoḷala – Kendora – Mānya – Nandigrāma – prabhṛti –  
daśa – grāma – paribhogeṇa samarppayadhvam – iti

かつて父および兄によってマクテーデシュヴァラ寺院に寄進された10か村、すなわち  
シュリーヤンバータカ村、ティルマリに2か村、ナサヴェーに2か村、ヴリーヒム  
カ村、ケスヴォララ村、ケンドーラ村、マーニヤ村、ナンディ村を [継続して] 寄  
進する。

tad – uttarōttara – pravarddhamāna – rājya – pañcama – śrī – varṣe pravarttamāne siddhārthe  
Vaiśākha – pūrṇṇāmāsyām – idam pratiṣṭhāpitvām [11\*]

ますます繁榮する王国の [マンガレーシャ王の] 統治5年の本年、シッダールタ  
年<sup>(6)</sup>、ヴァイシャーカ月の満月の日にこれを建てる。

## 2) バーダーミ3窟碑文（抄訳）

sakti – traya – sampannaḥ Caḷikya – vaṃśāmbara pūrṇṇa – candraḥ

[マンガレーシャは] 3つの力（シャクティ）を具備した、チャールキヤ家という  
天空の中の満月

anēka – guṇa – gaṇālamkṛta – śārīraḥ sarva – śāstrārhta – tattva – niviṣṭa – buddhiḥ

その身体は多くの美質で飾られていて、その心（知識）はすべての学問の目的の神  
髓で満たされている。

ati – bala – parākaramōtsāha – sampannaḥ śrī – Maṅgaleśvaro raṇavikrāntaḥ

pravarddhamāna – rājya – samvatsare dvādaśe Śakanṛpati – rājyābhiṣeka – samvatsareṣv

atikrānteṣu pañcaṣu śateṣu

類い稀な力強さ、勇気、熱意を備えた、聖なるマンガレーシャ王、戦いにおける英雄が、繁栄する王国の統治12年、シャカ王の王国樹立の際の灌頂から過ぎること500年（シャカ暦500年）

nija – bhujāvalambita – khaḍga – dhārā – namita – nrpati – śiro – mukṭa – maṇi –  
prabhārañjita – pādayugalaḥ catus – sāgara – paryyant – āvanī – vijaya – maṅgalaikāgārah  
paramabhāgavato layane mahāviṣṇu grhaṃ

[マンガレーシャの] 両足は、自ら手にした武器によってちぎり落された敵の王たちの頭飾りの宝石によって光輝き、四つの海に囲まれた大地を征服によって吉祥の土地となした、熱心なヴィシュヌ神の信者 [のマンガレーシャ] が、この石窟を偉大なヴィシュヌ神の住み処とした（として造営した）。

碑文には、このあとナーラーヤナ・バリ nārāyana-bali という儀礼<sup>(7)</sup>を挙げるために16名のバラモンにランジーシュヴァラ Lañjīśvara という名の村を寄進した旨が記されている。

### 3) バーダーミ第3窟・カンナダ語碑文（全訳）＊行分けは原文のまま

1. svasti [11\*] śrīmat pṛthivīvallabha – Maṅgalīsanā
2. kal – manege ittōdu Laṃjigēsaram dēvarkke pū-nīṛuva
3. māla – kārarge arddha – vīsadi ittōdān – aḷivon
4. pañca – mahāpātakan akum (akkum) eḷaneyā narakadā puḷu akum (akkum)

幸いあれ。聖なる大地の女神に愛されるマンガリーサ（マンガレーシャ）の [作った神の] 石の住み処に寄進されたランジゲーサラ村 [から]、神に捧げる花輪を作って持ってくる花環づくりに半ヴィーサ<sup>(8)</sup>を与える。これ [この篤信の行為] を侵す者は、五大罪<sup>(9)</sup>を犯した者の罪と同じ罪を犯したことになり、7番目の地獄に虫となって生まれる罰を受けることになろう。

マンガレーシャ王への賛辞は美辞麗句の連なりと見えるが、これはサンスクリット刻文の常套で、プラシャスティ（praśasti 頌徳辞）と呼ばれるものである。本稿の例でも1）、2）の碑文においては、さらに長く賛辞が連ねられている。その中には少なからず重要な情報も込められていて、1例をあげれば、王の義母のドゥルラヴァデーヴィーの美德を『マハーバーラタ』の中の挿話であるナラ王物語の女主人公の貞女ダマヤンティーに喩えている箇所が目立つ。『マハーバーラタ』の内容を熟知している土壌が存在して初めて

意味をもつ表現であり、サンスクリット文化受容の一つの具体的なあり方を示して注目される。

筆者はかつて、前期チャールキヤ朝に先行するカダンバ朝のサンスクリット文化受容について論じたことがあり<sup>(10)</sup>、その南インド文化史上の意味については稿を改めて検討したい。

## 2. マハークータ寺院群について

マハークータ寺院群は、首都バーダーミから直線距離にして約4km東に位置しており、西の端にバーダーミの諸寺院をかかえる丘陵と同じ丘陵の東縁に立地する。〔地図参照〕丘陵上に寺院が建設されたバーダーミとは異なり、寺院は裾野の平坦地にあるため、町と寺院との距離ははるかに接近している。宮殿の遺構はバーダーミでもここでもその存在がまだ確認されていないが、マハークータはそれを建設するのに十分な環境を備えているといえるだろう。王朝後半期にパッタダカルが王都としての機能を発揮するようになる以前は、マハークータがそれを担っていたとみることも決して不可能ではないといえる。比較してみれば、首都バーダーミは、それを「難攻不落の砦とした」というプラケーシン1世の碑文にあるように<sup>(11)</sup>、防衛上の機能を強く持った都市であった。

マハークータの諸寺院の年代については、明確な記録が少なく詳細は分かっていない。



図1 マハークータ

しかし寺院が集中する一帯は、前期チャールキヤ朝時代からの建設によって成立したことはほぼ確実と考えられる。なかでも、上掲 1) の碑文にある「神の乗り物の舟 devadronī」が、現在壁によって囲われた寺域内の人工池の中に位置する小さな祠を意味していることは間違いない。[図 1 参照] 前期チャールキヤ朝についての定評ある研究書を公刊した K.V. ラメーシュによれば、この舟は天界の神々のもとへ死後の魂を運ぶものであるという<sup>(12)</sup>。また、筆者がマハークタ来訪の折、池は自然の湧水を湛えていて枯れることないと聞いた。特別の意味をもった「舟」を表現するのに好適の場所であったといえよう。東屋風の小建築である祠には、4つの顔を持つシヴァ・リングが祀られており、建物は池に浮かぶ舟のように見える。碑文の記述から、おそらくこのシヴァ・リングを祀る祠が王朝樹立者プラケーシン 1 世の時から信仰され始めた最初の構築物であり、マクテーシュヴァラと呼ばれていた。「宝冠 (マクタ) のシヴァ神」という意味である。その後しだいに周囲に寺院が増築されて今日の景観をなすに至ったと考えられる。この祠と池が寺域全体のほぼ中央を占めることも、その推測を強くさせる。[図 2 マハークタ・プラン] 寺域全体と周辺の土地の名にもなっているマハークタは、現在寺域の北の端に位置し今なお信仰を集めるマハークテーシュヴァラ寺院にちなむが、マハークテーシュヴァラ(「偉大で突出した力のシヴァ神」の意) は明らかに古名のマクテーシュヴァラが変化したものである。寺院群へと発展していく過程で、より堅固で大きな建造物へと中心の神格が移ったものであろう。

いずれにせよ、マンガレーシャの時代にも、碑文が示すように多くの村の寄進が継続さ

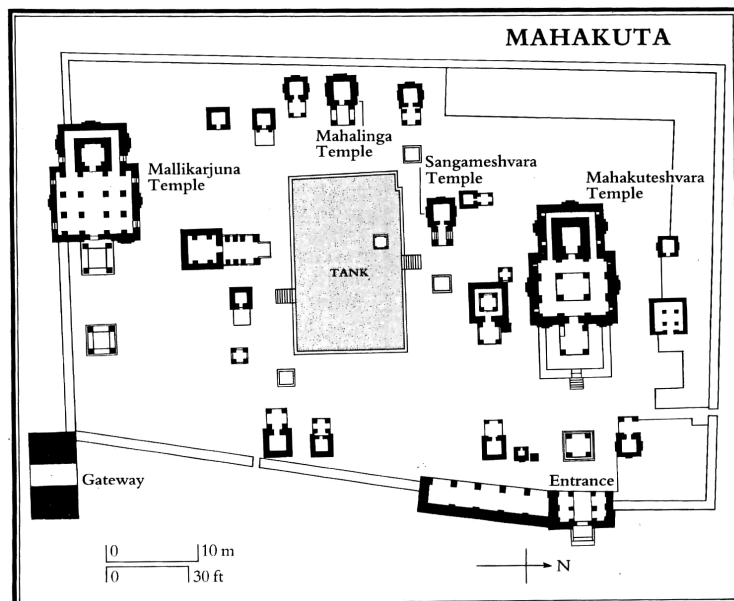


図 2 マハークタ・プラン

れマクテーシュヴァラ寺院での信仰活動が維持されていた事実は重要である。寺院にはバラモン僧侶をはじめとしてかなりの数のスタッフがいて、その生活が村からの収入によって支えられていたと考えられるからである。その中に後に王都パッタダカルに発展するキスヴォラル（碑文のケスヴォララ）が含まれていた意味は大きい、この点については後述する。

また、マハークータ石柱碑文には後に付加された2行の文が刻まれていることもここで見ておこう。上の行がサンスクリットであるのに対して、下の行がカンナダ語で記されていることも注目される。

[上の行] Āryapuravāsakaḥ Pubesasya sutau sthāpitā idaṃ dharmmajayastambhaṃ  
vyāpārakāśca tau

アーリヤプラ（アイホレ）の住人で商人のプベーサの2人の息子が、ダルマの〔勝利を記念する〕柱である、これを建てた。

[下の行] Dāṭa Āna kaṭṭida pū-kambha

ダータとアーナ（の2人）が、この花の（飾りのある）柱を刻んだ。

文脈からみて、ダータとマーナが上の行のプベーサの2人の息子であると考えられる。この2行がいつ頃付け加えられたかわからないが、主体部分とそれほど時の隔てなく刻まれたと考えてよいだろう。前期チャールキヤ朝の重要都市の一つで商業センターであったアイホレとマハークータとの結びつきを知ることができる。主文では、後代に王都となったパッタダカル（ケスヴォララ）との関わりが示唆されていたことと併せて、初代王の時に王朝の信仰が始まったマハークータが、3代マンガレーシャの時代には周辺の諸都市と結びつきさらに多くの面で発展の様相を見せ始めていた証左といえよう。

### 3. マンガレーシャの出自と婚姻

マンガレーシャの出自を直接に示す記述は刻文には見られない。それとは対照的にマンガレーシャと内乱を戦ったプラケーシン2世は、忠実な封臣であったセンドラカ家の首長セーナーナンダラージャ Senānandarāja が母方の伯父（mātula）であること、すなわちこの首長の妹が母であったことがチプルン銅板文書に記されている<sup>(13)</sup>。

また、父プラケーシン1世にはドゥルラヴァデーヴィーの他に今一人の妃インドウカーンティ Indukānti の存在が判明しているが<sup>(14)</sup>、それがマンガレーシャの母であったとはいずれの史料にも記されていない。

マンガレーシャが兄キールティヴァルマン1世の母ドゥルラヴァデーヴィーをたいへん



重要視していたことは碑文1)から窺うことができるが、自身の母については、少なくとも刻文には何も記していない。その背景には、自らの母系からは期待し得ない政治的支援を、比較的地位の高い義母の家系から得ようとする意図があったと筆者は考えている。事実マンガレーシャの統治晩年のゴア銅板文書では、義母ドゥルラヴァデーヴィーの兄ドゥルヴァラージャ・インドラヴァルマン Dhruvarāja Indravarman が、マンガレーシャによってゴアを含むインド半島部西海岸地域のかなりの広い地域(4つのヴィシヤヤ・マンダラ)の統治を委ねられており、両者の結びつきはたいへん強かったことが判明している<sup>(15)</sup>。冒頭述べたように、統治晩年は甥のプラケーシンとの間での確執が表面化し内乱にまで至った時期である。この文書からその時バップーラ家がマンガレーシャ側についていたことは明らかである。

プラケーシン2世には、支援者として母の一族であるセンドラカ家が存在していたし、地方支配者のバーナも内乱の際、プラケーシン側についていたことが刻文から判明している<sup>(16)</sup>。それに対抗しうる自らの支援勢力とすべく、直接血縁にはない義母の一族を頼みとしていたと考えられるのである。

マンガレーシャの母について現存史料から明らかにすることはできないが、筆者なりの見解を後に述べる。

次いでマンガレーシャの夫人について見てみよう。王の統治8年のマールトゥーラ村寄進銅板文書は、前期チャールキヤ朝の封臣として王国東部のアーンドラ地方での戦いで戦死した、アールカ(アールバ)の首長の忠誠を顕彰する目的でなされた寄進を記録するものである<sup>(17)</sup>。この寄進を要請したのが、マンガレーシャの夫人のうち最年長で強い影響力を持つ(agra-mahādevī)のカダンバー・マハーデーヴィー Kadambā-mahādevīであった。この妃の父が戦死したアールバの首長であったことも判明するが、カダンバーという名は、その母が同じくチャールキヤ朝の封臣であったカダンバ家の出身であった可能性を示唆する。カダンバは独立以前のチャールキヤ家の宗主であり、独立後はマンガレーシャの兄キールティヴァルマン1世によって破られ服属を強いられている。しかしマンガレーシャとプラケーシンの内乱の際には再び自立の動きを見せ、後者の勝利後再び征服されるという経緯をたどった。前者の統治8年のこの時点では、カダンバはアールパとともにチャールキヤ朝に従属していたことは明らかで、そうした状況下でマンガレーシャとカダンバ家出身の母を持つアールパ首長の娘との婚姻が成立していたのであろう。

先の、マンガレーシャのバップーラ家重視の状況と考え合わせると、王はより多くの地方勢力を自らの麾下において、政権の強化を図っていたのだと考えられる。

#### 4. バーダーミ3窟の造形表現が示唆するもの

前期チャールキヤ朝期の寺院群の中で石窟が穿たれているのは、バーダーミとアイホレ

においてである。後者については稿を改めて論じることとして、ここでは検討している碑文のあるバーダーミについて見ておこう。バーダーミには丘陵上に4つの石窟が並ぶが、うち3つがヒンドゥー教の、1つがジャイナ教のものである。便宜上、丘陵を下から上へと順に第1窟から第4窟と番号をつけて呼びならわしているが、これは必ずしも造営の順を示すものではない。[図3 バーダーミ第3窟プラン]

唯一造営の年代のはっきりしているのが、第3窟で、上掲2)の碑文にあるように、2代キールティヴァルマン在世中のシャカ暦500年(西暦578年)に、王弟マンガレーシャが造営したことが記されている。石窟が竣工した年であったと考えられる。他の3つの石窟の年代は示されていないが、窟の形式や彫刻表現の特徴などから、第3窟とそれほど時間の隔たりなく造営されたと考えられる。マンガレーシャの時代までにはすべての石窟が完成していたとみてよいだろう。

第1窟、第2窟はシヴァ神を中心とした造形、第3窟はヴィシュヌ神を主神として構成されている。第3窟は正面が20m以上の幅を示し他の石窟の倍以上の大きさの最大の石窟で、堂々とした神の殿堂の趣を持つ。[図4 バーダーミ第3窟正面] 入口右側壁のヴィシュヌの化身ヴァーマナ(倭人)が三步で全世界を跨いだというドゥリヴィクラマ像、内陣廂のヴィシュヌの乗り物(ヴァーハナ)である神鳥ガルダの像など数多くの卓越した浮彫で荘厳されている。

なかでも注目されるのは、内陣柱に腕木状に施された数組の男女の彫像で、一般には宮

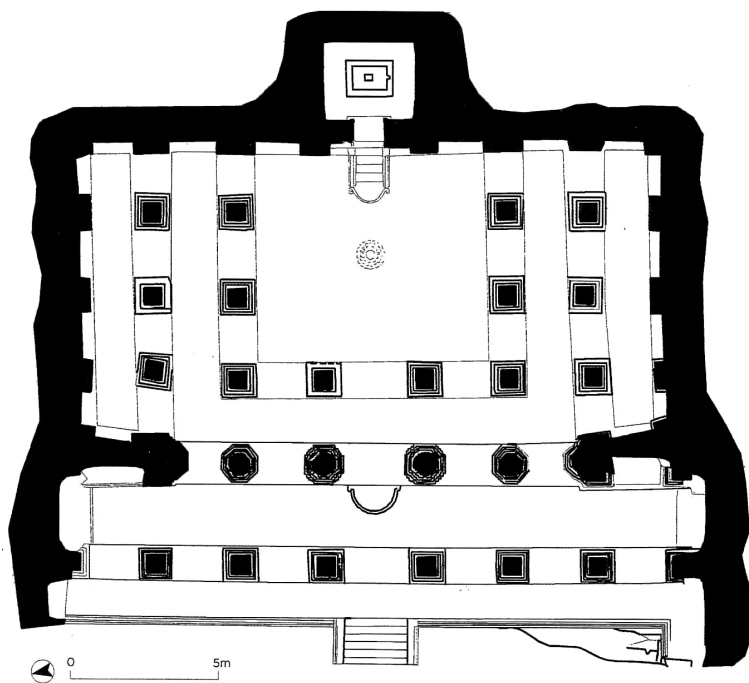


図3 バーダーミ第3窟プラン

廷の男女を表現したとされる。男女が様々な姿態で寄り添い絡み合う [図5、6、7 男女像]。中には男女合一による法悦の表現のミトゥナ像的な雰囲気漂わせるものもある。一方で男女の頭上には樹木と果実が表されていて、サーンチーのヤクシー像に典型的ないわゆる樹下美人(女神)像、インド彫刻ではしばしばシャーラバンジカー śālabhañjikā と呼ばれ女性と樹木との結びつきで豊穡をあらわす諸像<sup>(18)</sup>にも共通する要素を見せている。男女一対の像の側面に表現された女性の単独像には、豊穡の像の性格がより顕著である。

筆者は、この男女一対の諸像には、神の加護と恩寵によって国土に安寧と豊穡をもたらす祈りが込められていたと考えるが、その造像が進められる中で、この石窟をつくった王マンガレーシャの宮廷の雰囲気がそこに自ずと反映したともみている。その推測の根拠と

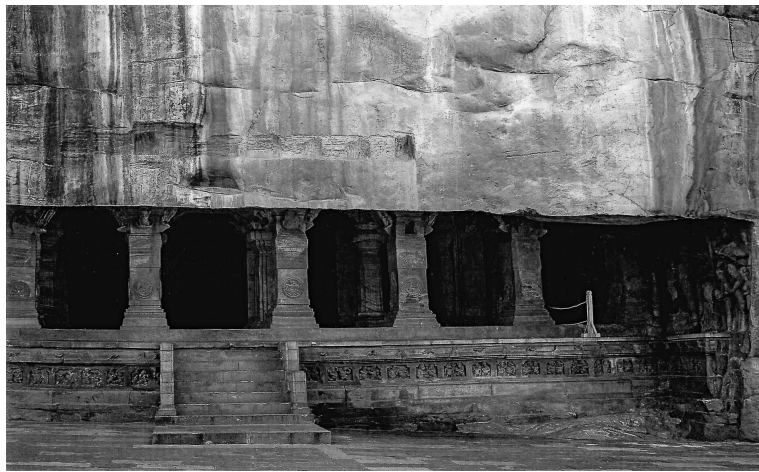


図4 バーダミ第3窟正面

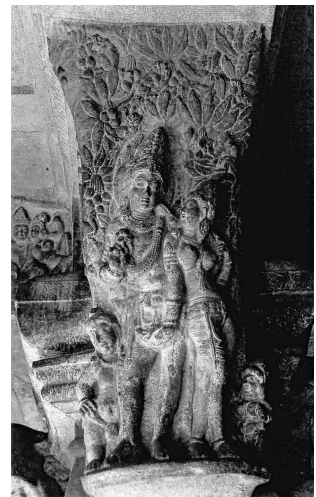


図5、6、7 男女像

なるのは、内陣廂に描かれた壁画である。今では剥落が激しくその姿をかすかに認めうるに過ぎないが、石窟に隣接する現地の考古博物館に復元展示されたそれには、まさしく王とおぼしき人物を取り囲む多くの女性と音楽家の姿が描かれていて、当時の宮廷の情景を垣間見させてくれる。豪華な宮廷を写そうとした壁画の表現意図は、男女一對の像や女性の単独像にも分かち持たれていたと考えてよいのではないだろうか。

筆者は、王を囲む宮廷群像の中に遊女が存在したと考えているが、その理由については後述する。

## 5. バーダーミ第3窟カンナダ語碑文の意味するもの

この碑文は同じ第3窟のサンスクリット碑文（587年）よりも後に刻まれたことは間違いないが、紀年がないため寄進の年月日は分からない。文章も簡略ではっきりとは記されていないが、花環づくりはおそらく定期的に花環を持ってきて神に捧げたのであり、その神も碑文が第3窟の壁に刻まれていたことからすれば、そこに祀られているヴィシュヌ神であったとみられる。花環づくりへの報酬半ヴィーサは、この石窟に寄進されたランジゲーサラ村（サンスクリット碑文の方ではランジーシュヴラ村）の収入から充当されたと考えられる。この村はバーダーミ近くの現ナンディケーシュヴァラ村に同定されており、花環づくりがこの村に住んでいた可能性も大きい。ヴィーサは貨幣の単位で、その価はハナ（パナ）金貨の16分の1であったとされる<sup>(19)</sup>。それが正しかったとすれば、金貨の32分の1が報酬となる。それが定期的に与えられたものか、あるいは一時金としてなのかはよく分からない。

碑文の字体はカンナダ文字の古い形を示していて、6世紀から7世紀にかけてのものと考えられている。マンガレーシャの治世中か、あるいは続くプラケーシ2世の治世の比較的早い段階で刻まれたものであろう。後者であった場合、内乱による王の代替わりにもかわらず、第3窟への支援は継続していたことの証となる。そればかりでなく、何より内乱の際の敵であったマンガレーシャの事績を継承する記録を刻ませていたことになる。したがって碑文はやはりマンガレーシャの治世中に刻まれた可能性の方が大きいと考えられるが、それでもその後も抹消されることなしに経過したという意味は、決して小さいものではない。

筆者は、一般の人びとに向けての告知の意味合いを強く持っていたカンナダ語碑文において、バーダーミ第3窟がシンプルに「マンガレーシャの石の家（kal-mane）」と記されていることに注目している。この石窟の造形表現上の達成度の高さは、バーダーミのどの石窟をも上回りヒンドゥー教窟としてはもっと優れたものの一つという評価があり<sup>(20)</sup>、その造営の成果を、石窟がマンガレーシャその人の家であったと喩えて表現しているからである。その碑文が掲げられ続けていたことは、当時の人びとが共通認識を持つにいたるう

えで大きな役割を果たしたであろう。

## 6. マハークテーシュヴァラ寺院碑文（カンナダ語）の検討 \*行分けは原文のまま

マンガレーシャの宮廷を考えるうえで参考となる碑文があるので以下に示しておこう。マンガレーシャの時代から約100年後の第7代ヴィジャヤーディティヤの治世のもので、1)と同じマハークータのマハークテーシュヴァラ寺院の壁に刻まれているものである。<sup>(21)</sup>

1. svasti Vijayāditya – Satyāśraya – śrī Pṛthivī-
2. vallabha – mahārājādhirāja – paramēśvara – bhaṭā-
3. rarā prāṇavallabhe Vināpōṭigaḷ – envor – sūle-
4. yar [1\*] ivarā mudu – tāyvir Rēvamañcaḷgaḷ-avarā
5. magaldir Kucipōṭigaḷ avarā magaḷu Vināpō-
6. tigaḷ illiye hiranyagarbham – iḷdu ellā dāna-
7. muṃ goṭṭu Dēvanā pīṭhamān kisuvine kaṭṭi belliyā
8. koḍeyān ēṛisi (ye) Maṅgaḷuḷle aṣṭāstam kṣē-
9. tra [m\*] goṭṭo [r] [ll\*] idān aḷidōn pañca mahāpātakan akkum [1\*]

幸いあれ。ヴィジャヤーディティヤ・サティヤーシュラヤ王、大地の女神に愛されている者、王の中の大王、至高の支配者、偉大な王に愛されているヴィナーポーティ大姉という名の遊女、この大姉の祖母で〔遊女の〕レーヴァマンチャル大姉、この大姉の娘クチポーティ大姉、後者の娘ヴィナーポーティ大姉<sup>(22)</sup>が、この地（マハークータ）において、ヒランニャガルバの儀式を挙行し、すべての〔なすべき〕寄進をし、神像の基壇をルビーで荘厳し、神像の上に銀の傘蓋を架け、マンガルツレ村の800単位<sup>(23)</sup>を〔マハークテーシュヴァラ寺院に〕寄進した。この寄進に損害を加えるものは、五大罪を犯したことと同じになる。

上の寄進をしたヴィナーポーティ大姉は、母・祖母の三代にわたってこの寺院に仕えていた遊女（sūle）であることが示されている。この例のように、遊女の家系の中には、王の建立した寺院に所属して王族と深く結びついた者があり、中には王の妻妾となるものも存在したと推測される。ヴィナーポーティが妻妾であったかは碑文の記述からは断定はできないが、その可能性は小さくなかったといえよう。その一族も、敬意をもって遇される身分であったばかりでなく、実際にヒランニャガルバ<sup>(24)</sup>など王族と同じ宗教儀礼を挙行し、かなりの規模の土地寄進を行うほどの土地所有者でもあった。その経済的影響力の大きさも、当時の社会の様態を知るうえで重要である。

おそらく、ここマハークータや前稿で示したパッタダカル<sup>(25)</sup>ばかりでなく、バーダー

ミ、アイホレなどの主要都市には遊女の集団が存在していて、王家とかかわる者ばかりでなく、地域の住民と結びつく遊女の一群もあったと考えてよいのではないだろうか。パッタダカルでは、王朝後半期の8世紀に王立の寺院建立にあたってその柱を寄進している遊女が存在した。このような遊女の社会的・経済的地位は相当高く、おそらく遊女の階層の頂点に立つ存在であったであろう。遊女全体としては上下の身分にかなりの幅のある一種の職能集団であったと推測される。

とくにパッタダカルは、王朝初期にマハークータのマクテーシュヴァラ寺院に寄進された村としてその発展が始まっている。マハークータにおける遊女の存在が、時の経過とともにそこに寄進された村の一つであるケスヴォララ（パッタダカル）の寺院にも拡大した可能性を考えておきたい。後者の発展の中で王が建設した寺院に柱を寄進するほどの遊女が出現するようになったものと考えられる。

マンガレーシャの複数存在した夫人の中で、その名を知ることのできる唯一の妃カダンバー・マハーデーヴィーについては先述したが、ここで改めて王の母について考えてみたい。父が王朝の創始者プラケーシン1世であったことは明らかなので、ドゥラヴァデーヴィーやインドクアンティ以外の父の夫人がその母であったことになる。もとよりその名が刻文に記されていない以上特定はできないのであるが、筆者はそれが上のヴィナーポーティの例と同様の遊女であった可能性も否定できないのではないかと考えている。仮のその出身が地方支配の有力者の一族であったとすれば、その一族全体を自らの支援者としようとするマンガレーシャの意向によって、何らかの形でその名が家の名とともに刻文に記される確率は高かったはずである。しかしそうした記録はなく、マンガレーシャが最も頼りとしたのは、兄キールティヴァルマン1世の母、すなわちマンガレーシャにとっては義母にあたるドゥラヴァデーヴィーの一族であった。マンガレーシャがこの義母を「父の妃」として記していたのは先にみたとおりである。

王として配偶者は複数選べても、当然のことながら「生みの母」を決めることはできない。この事情を勘案すれば、マンガレーシャの母として、宮廷において一定の地位を占めることはあっても、少なくともこの時点では政治勢力としては十分な力を持ち得なかった存在として遊女の家系が浮かび上がるのである。もちろん、これはあくまで可能性の範囲にとどまるという性質の問題であって事実の指摘とは異なる。

上で見たマクテーシュヴァラ（マハークテーシュヴァラ）寺院に仕える3代にわたる遊女の家系は、マンガレーシャの時代よりも後のものであるが、筆者はマンガレーシャの母が遊女であった可能性があるとする推測の一つの根拠としている。マンガレーシャの宮廷にも多くの女性が伺候したであろうことは、バーダーミ第3窟の諸像や壁画が暗示している。先述のように、筆者はその中に遊女が含まれていて不自然ではない状況が、王朝樹立の当初から成立していたと考えるのである。むしろマンガレーシャの母が遊女の出身で

あったことによって、その地位が王朝後半の時代に向かって上昇していったのではないだろうか。王都パッタダカルの碑文が示す遊女の存在がその可能性を大きく示唆している。

おわりに

これまで、第3代マンガレーシャの時代の宮廷のあり方を中心に検討してきた。

冒頭述べたように、現存史料はマンガレーシャの政策や王を取り囲む人々の姿を必ずしも十分には伝えてはいない。そうした事情がありながらもとくにその母を遊女であったと推測したのは、王のもとで成立した宮廷文化が、その後の王朝の宗教文化政策を大きく方向づけたと考えたからである。遊女の存在を記した史料を後代のものにまで下って参照したのも同じ理由に基づく。

遊女は王朝後半期には間違いなく重要な役割を果たしており、その存在を前半期にまで遡って宮廷文化の中に正当に位置づけすることなしには、当時の文化の特質を明らかにすることはできないと考えているからでもある<sup>(26)</sup>。

もとより上の推論には遺漏の点も少なくないと思う。識者の教示を願う次第である。

#### 主要参考文献

- 石川 寛 [1987] 「バーダーミのチャールキヤ朝下の地方支配者について」中央大学文学部紀要・史学科第31号
- 同 [1999] 「古代デカンの国家—カダンバ朝を中心に」『岩波講座世界歴史 6 南アジア世界・東南アジア世界の形成と展開』岩波書店
- 同 [2009] 「ラーシュトラクータ朝クリシュナ2世の寄進文書(10世紀初め)」歴史学研究会編『世界史史料2 南アジア・イスラーム世界・アフリカ』岩波書店
- 同 [2013] 「前期チャールキヤ朝史の再検討—3代王・4代王の治世を中心に」東洋学研究第50号、東洋大学・東洋学研究所
- 同 [2014] 「前期チャールキヤ朝史の再検討(その2)—第5代ヴィクラマディティヤ1世の治世を中心に」東洋学研究第51号、東洋大学・東洋学研究所
- 同 [2016] 「パッタダカルをめぐる諸問題」『高橋継男教授古稀記念 東洋史学論集』東洋大学文学部東洋史研究室
- ヴァーツヤーヤナ(岩本裕訳) [1998] 『完訳 カーマストラ』平凡社(東洋文庫)
- 大岡信 [2017] 『うたげと孤心』岩波書店(岩波文庫)
- シュードラカ(岩本裕訳) [1959] 「土の小車」『筑摩書房世界文学大系 4 インド集』
- 田中於菟彌(訳) [1986] 『遊女の手引き—クッタニー・マタ=遺手女の忠告』平河出版社
- 藤山覚一郎・横地優子(訳) [1994] 『遊女の足蹴—古典インド劇・チャトゥルバーニー』春秋社
- Desai, P.B. et al. [1981] *A History of Karnataka*, 2<sup>nd</sup>.ed. Dharwad.
- Dikshit, D.P. [1980] *A Political History of the Chālukyas of Bādāmi*, New Delhi.
- Michell, George [1989] *The Penguin Guide to the Monuments of India, volume 1 : Buddhisit, Jain Hindu* London.
- Ditto [2014] *Temple Architecture and Art of the Eary Chalukyas : Badami, Mahakuta, Aihole, Pattadakal*. New Delhi.
- Padigar, Shrinivas V. [2010] *Inscriptios Calukyas of Bādāmi*, Bangalore.

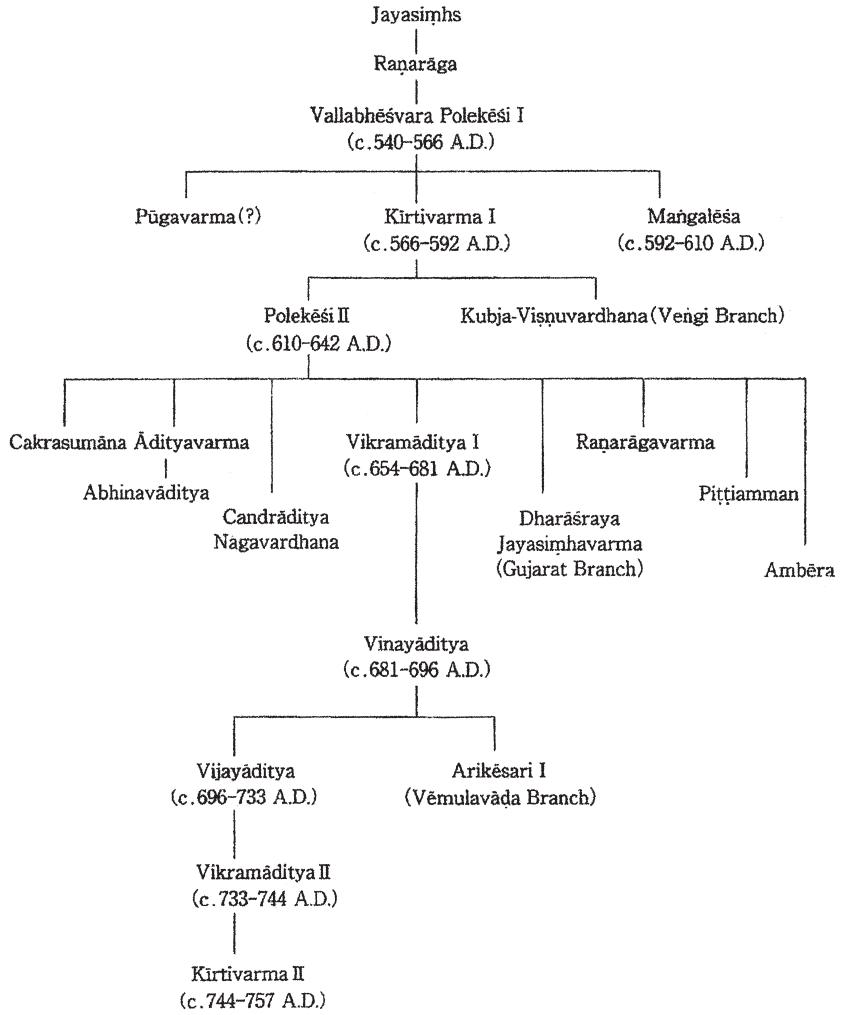
Ramesh, K.V. [1984] *Chālukyas of Vātāpi*, Delhi.  
Sircar, D.C. [1966] *Indian Epigraphical Glossary*, Delhi.

〔註〕

- (1) アカーラヴァルシャ（時ならぬ雨を降らすことのできる）、アモーガヴァルシャ（実り豊かな雨を降らす）、ブラブータヴァルシャ（豊富に雨を降らす）など。石川 [2009] 特に註3を参照。
- (2) 石川 [2013]
- (3) Padigar [2010] No. 8 以下、準拠した刻文テキストについては、パディガールの刻文集の掲載番号を掲げ、掲載されていない場合のみ、その初出を示す。
- (4) Padigar No. 6
- (5) Padigar No.13
- (6) 60年を1周期とするヒンドゥー暦の年の1つ。
- (7) ナーラーヤナ・バリは、罪深くして死んだ者への葬送儀礼の意味もあり、その場合第3窟の活動とどのようにかかわるのか、詳細は不明。
- (8) 貨幣の単位。パナ金貨の16分の1の価とされる。Sircar [1966] p.376
- (9) バラモン殺し、飲酒、黄金を盗むこと、師の妻と性的交わりを持つこと、以上4つの罪を犯した者とかかわりを持つこと、の5つをさす。Sircar [1966] p.230
- (10) 石川 [1999]
- (11) Padigar No. 1
- (12) Ramesh [1984] p.47
- (13) Padigar No.24
- (14) アイホレ碑文、3～4行目：Padigar No.22；Ramesh [1984] p.38
- (15) Padigar No.12
- (16) ベッダヴァダグール碑文、Padigar No.14；Ramesh [1984] pp.76～77
- (17) マールトゥーラ村寄進銅板文書は、かつてはプラケーシン2世のものともみなされていた時期があったが、他の刻文の統治年との整合性から現在はマンガレーシャのものとする見解が支配的である。筆者も同様に考えている。ただし、アールパは内乱後のプラケーシン2世の治世以降もチャールキヤ朝の封臣であり続けていて、内乱の際、一族の娘が妃となっていたマンガレーシャとの関係がどのようなものであったか、今後に解明の残された課題である。Padigar No.10；石川 [2013]
- (18) シャーラバンジカーには「遊女」の意味もある。Cf. M.Monier Williams, *Sanskrit – English Dictionary*, Oxford University Press, 1899, p.1067
- (19) 註（8）を参照。
- (20) Michell [2014] など。
- (21) Padigar, No. 117
- (22) 自身、母、祖母の三代に対して、いずれもその名の末尾に尊敬の意を表す複数形語尾（honourific plural）gaḥが付けられていることから、「大姉」の語を用いた。
- (23) 地積単位と考えられるが、詳細不明。
- (24) ヴェーダの祭式。ヒランニャガルバは「黄金の子宮」を意味して原初の世界生成を象徴する。儀式は王の即位の際などに王権の正統性を誇示するために行われる。
- (25) 石川 [2016]
- (26) ゲプタ朝時代に成熟した遊女の文化があったであろうことは『土の小車』『遊女の足蹴』などの文学作品からうかがい知ることができる。また時代と場所を大きく隔てていてとうてい同列に論じることはいえないとはいえ、天皇（法皇）と関係を持った遊女が日本の文学伝統の中で果たした役割の小さくないことを示す、大岡信『うたげと孤心』の「帝王と遊君」が参考になる。



Genealogy of the Calukyas of Bādāmi



Padigar の刻文集掲載の系図 (一部修正)

キーワード：前期チャールキヤ朝、マンガレーシャ、マハークータ、遊女（スーレ）、  
バーダーミ石窟（第3窟）